以上述べてきた所見から、今回検出した遺構は、過去に堺市教育委員会により行われた調査で検出された不明土坑[2]に符合するものと考えられる。各々の調査地が離れているため、このような遺構が当陵の周辺にかなり広範に存在していた可能性もあろう。また、堺市の同じ調査で二重堀も確認されている。今回の調査地は、現在の堀から僅か一五メートルの距離であり、前方部の正面という位置からも二重堀の存在が予想されたが、今回の調査地ではその存否は確認できなかった。

これらの調査結果を踏まえ、工事は予定通り施工した。

（清喜裕二）

註

（1）白神典之「堺摺鉢と明石摺鉢」『江戸の陶磁器』（江戸遺跡研究会　第三回大会発表要旨）　一九九〇年

（2）堺市教育委員会『向井神社跡遺跡発掘調査概要』一九八〇年

般舟院陵見張所改築工事箇所の立会調査

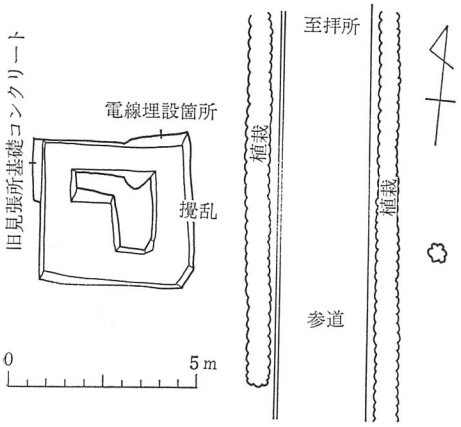
第一〇三代後土御門天皇後宮贈皇太后朝子般舟院陵は、京都市上京区般舟院町にあり、三分骨所一〇墓が同一兆域内にある。

今回当陵の見張所が経年のため老朽化し、改築工事が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地にあたるため、基礎部及び付帯工事に伴う掘削に先立って平成八年八月二十八日から三日間立会調査を実施した。

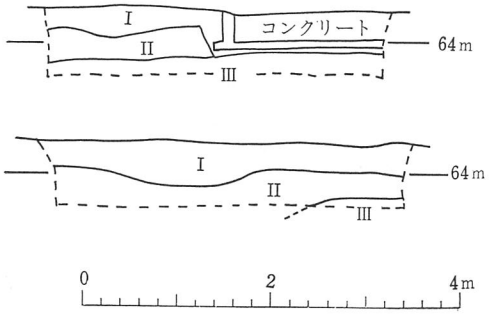
掘削区域は、旧見張所を撤去した跡地である（第30図）。掘削箇所の北面半分ほどには、旧見張所の基礎コンクリートがそのまま残っていた。さらに、東側は昭和五十八年度に実施された電灯電話設備設置の際に設けた地下ケーブルによって攪乱を受けている（本誌第三六号報告参照　昭和六十年二月刊行）。

このような状況の中で、掘削箇所の土層断面図は第31図に示したとおりである。土層は大きく三層に分けることができた。

Ⅰ層　表土　旧見張所の基礎、及びその際の埋戻し土。



第30図　般舟院陵調査箇所の位置（1/200）



第31図　般舟院陵調査箇所の断面(1/80)

Ⅱ層　暗茶褐色土　表土よりは締まりがある土層。遺物包含層。

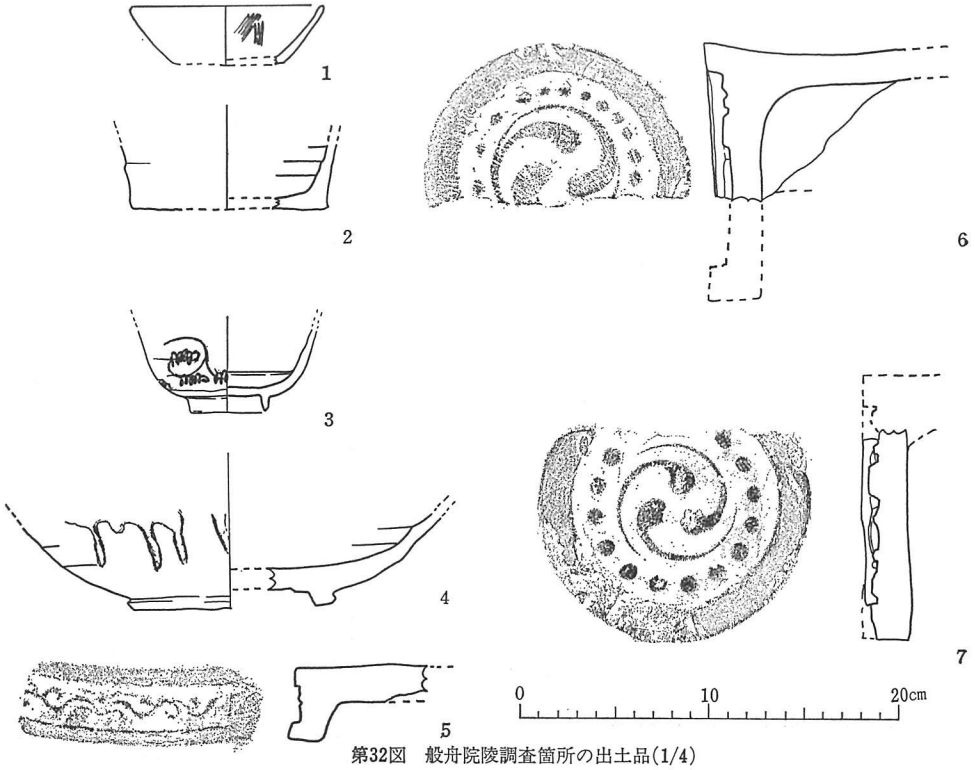
Ⅲ層　黄褐色粘質土　この土層は先の報告にあるⅣ層に対応し、地山。西壁面では今回の掘削床面の高さにおいて、直径五～一五センチほどの円礫を多数含んでいる。

この地山面で、遺構の有無を確認するために精査を行ったが、遺構は一切検出されなかった。おそらくこの地山面も削平を受けている可能性が高いものと判断できる。

遺物は合計四三点出土している。瓦、陶磁器片などがあり、前述したⅡ層の中に、特に集中することなく混入した状況で出土した。明らかに盛土の中に包含されたものであり、出土した遺物も日常雑器一般にわたる。これらは、特に当該区域の性格を示すようなものでもないようである。

図化できた遺物は第32図に示したとおりである。1は美濃系の陶器皿であり、すり鉢状の刻み目がある。2は小片ながら備前系陶器と思われる。3は肥前系の磁器碗であり、その他にも一重の網目文様が描かれた磁器碗片も存在する。4は肥前系の陶器であり、白い釉薬がかけられている。5は唐草文様が表現された軒平瓦であるが、全体に摩耗している。6、7は巴文様の軒丸瓦である。両者を比較したとき7の方が珠文が明瞭であり、また巴文様の各頭部が大きい。これらの違いは両者の所属時期が異なる可能性も考えられよう。

これらの遺物が示す年代観は、江戸中期から後期にかけて、あるいは



第32図　般舟院陵調査箇所の出土品(1/4)

一部明治期に下る可能性がある。

以上のように見張所改築区域では遺構は検出されず、また付帯工事に伴って掘削した箇所においても遺構は検出されなかった。よって、工事は予定通り施工した。

（徳田誠志）

三嶋藍野陵見張所下水道管埋設箇所の立会調査

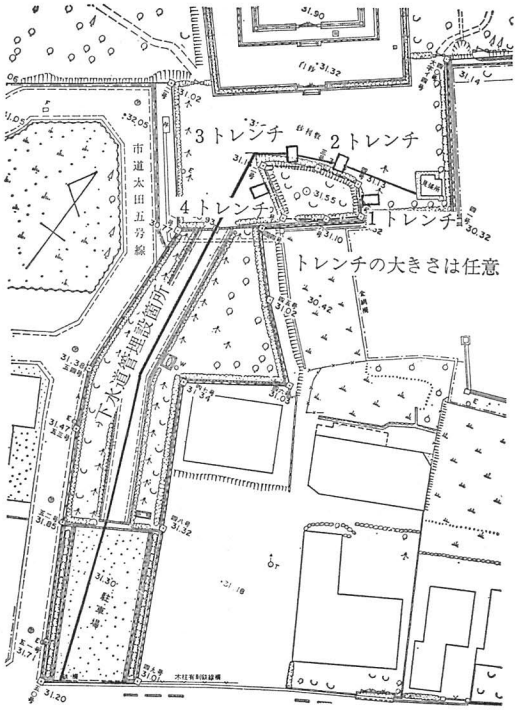
継体天皇三嶋藍野陵は、北摂を代表する前方後円墳である。今回の立会調査は、陵前を通る市道に下水道本管が整備され、この本管と拝所の一画にある見張所を結ぶ新しい下水道管が埋設されることに伴って実施したものである。調査は平成八年九月一日から四日間実施した。

調査は域内陪冢車塚に接する箇所に四本のトレンチ（二メートル×一メートル）を設けて掘削した（第33図）。この部分に重点的にトレンチを設けた理由は、車塚が古代高塚式の陪冢であれば、その遺構、遺物の出土が予想されたためである。また、市道に至るまでの参道部分の掘削にあたっては、随時立会調査を行った。

1トレンチから順に掘削箇所の概要を記述していく。1、2トレンチは車塚の北側に設定した。掘削の結果両トレンチの土層断面の状況は極めて類似していた。すなわち、数センチの白砂層の下に八〇センチほどの厚さに暗黄褐色土（Ⅰ層）が堆積していた。この層は途中締まり具合によって上下に分層できるが、土質は全く同じものである。その下に厚さ二〇センチほどの灰色粘質土（Ⅱ層）がある。さらにその下は黄褐色礫混り土（Ⅲ層）が観察された（第34図）。このⅢ層は非常に固く締まった土層であり、地山であると判断した。

このⅠ層、Ⅱ層の性格としては、Ⅰ層は締まりのない土質から見て盛土であることは疑いがない。また、その土質が基本的には地山の土質と同じものであることから、近くの地山を掘削して盛土とした可能性が高い。一方Ⅱ層は、旧水田の耕作土及び床土であると判断した。また、この高さから湧水があった。

3トレンチでは、表土下六〇センチほどの所に土管が埋設してあり、



第33図　三嶋藍野陵調査箇所の位置(1/1000)